

2 加工業務用キャベツに適する品種の選定と大玉栽培

ねらいと成果

キャベツは消費量が多い品目で、全生産量の約半量が加工業務用で使用されている。加工業者などの実需者が望む業務用キャベツは、結球内部に葉が詰まっている寒玉系が主である。加工の初期段階で除去される芯（結球部に存する莖部）の大きさは、作業性及び歩留まりの面から結球重に対する重量割合（芯割合）が小さいものが好まれる。また球が大きい（重い）と1玉から多くの製品が得られ、作業能率が向上するため、加工業務用では家庭消費用（ML玉、1~1.6 kg）よりも大きなサイズが望まれる。さらに、用途によって必要とされる結球重に差がみられる。

上記の需要に対応するため、肥大性が良く芯が小さい加工業務用に適する冬期収穫用品種を選定した。また、栽植密度に対する結球重と収量の関係を調査したところ、栽植密度は収量には影響せず、疎植にするほどキャベツの大玉化が可能であった。

内容

冬期収穫用の品種比較試験を行った。栽植密度は4,167株/10 aとし、収穫調査は調査対象株が裂

球し始めたときに実施した。結球重は多くの品種で2 kgを超え、肥大性は良好であった（表）。しかし芯の大きさは品種によって異なり、「夢舞台」は芯長5.8 cm、芯割合2.9 %、「彩音」ではそれぞれ5.9 cm、3.1 %と小さく、両品種を有望品種とした（図1）。

品種「夢舞台」を用いて、10 a当たりの株数を2,963~4,762株の範囲で5段階設定し、栽植密度と結球重及び収量の関係を調査した。裂球が始まった2月20日における結球重は、4,762株で1.7 kg、3,704株で2.3 kg、2,963株では2.9 kgとなり、栽植密度が小さいほど結球重は大きくなったが、10 a当たりの換算収量は8 t強でほぼ同等であった（図2）。適切な栽植密度を設定することで、収量に影響なく目標とする結球重の大玉キャベツを生産できると考えられた。

今後の方針

他の作型について、加工業務用の有望品種の選定と、栽植密度と結球重及び収量の関係について検討を進める。

斎藤 隆雄（農業技セ・園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2425）



図1 品種の違いによる芯の形状の相違
写真上：「夢舞台」、写真下：「YR冬太郎」

表 冬期収穫用キャベツの品種特性

品種	収穫日	結球重 (kg)	球径 (cm)	球高 (cm)	芯長 (cm)	芯割合 (%)
SK1-323	1/9	2.43	20.1	14.3	7.4	3.7
YR冬太郎	1/18	2.43	21.4	15.4	9.6	4.5
YR大受	1/19	2.06	21.5	17.8	8.3	3.7
あわじ	1/19	2.15	19.7	13.0	7.5	4.6
夢舞台	2/3	2.04	20.9	12.2	5.8	2.9
彩音	2/14	2.36	21.6	13.4	5.9	3.1
賀茂みどり	2/14	1.84	20.5	11.8	6.5	3.7

※芯長及び芯割合は結球重2kgを目安として収穫した場合の数値

※は種：2006年8月4日（128穴セルトレイ）、定植：8月31日（畝幅120cm、株間40cm）
施肥用：N成分量 29kg/10a

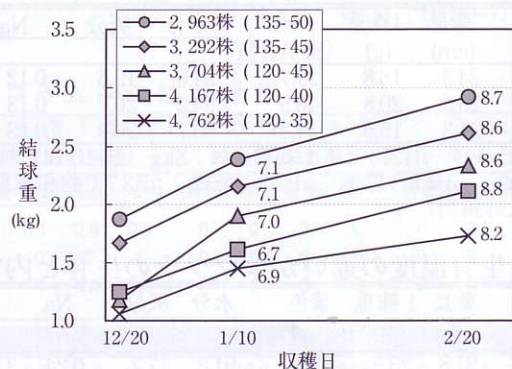


図2 栽植密度の違いが結球重及び収量に及ぼす影響（2007年8月15日は種、9月7日定植、品種「夢舞台」）
※マーカーに付した数字は10 a 当たりの換算収量(t)を、凡例の括弧内の数字は（畝幅）-（株間）(cm)を示す。